



吉岡実「僧侶」試論：四人の僧侶が住んでいる場所

叶，真紀

(Citation)

国文学研究ノート, 36:45-55

(Issue Date)

2001-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012345>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012345>



吉岡実「僧侶」試論

四人の僧侶が住んでいる場所

叶 真 紀

はじめに

「僧侶」は一九五七（昭和三二）年に執筆され、同年四月、『ユリイカ』に掲載されたものである。その後、吉岡実 は第三詩集『僧侶』に収められることになる「僧侶」以外の十八篇を書いている。そのうちの一篇、「苦力」を吉岡が谷川温泉宿で一夜にして完成させたというエピソード^①は、「苦力」の作品世界が既に吉岡の内部で充分に構成されていたことを意味する。最初に執筆され発表された「僧侶」を基盤として、詩集『僧侶』の世界が吉岡の内部でどのように組み立てられていったのか、ということを考えてみたい。また、今回は触れないが「僧侶」は形の上でもそれまでのモダンイズム色の残る口語自由詩とは一線を劃する、方法的にはるかに自覚的な詩^②という指摘があるように、吉岡詩作品の変遷を論じる上で「僧侶」は重要な作品だと言えよう。

また、詩集『僧侶』の中でも「僧侶」は、「他の詩に較べれば絵巻きのであり絵画的」^③との評言がある。しかしながら、

『僧侶』の時期の詩作品は、従来の作品の「視覚性というか外側から見ているという感覚」^④が次第に薄れ、「フレームが内側から崩されてい」^⑤ることも指摘される。ある程度の評価が為されているが、吉岡の詩作品を論じるには個々の作品について考える必要があるだろう。

本稿では、「僧侶」を本文に沿って読み解いていき、「僧侶」が創り上げる世界を考えたいと思う。

四人の僧侶のうち一人が殺された理由

「僧侶」は、アラビア数字1〜9で区切られている。1では一人の僧侶が「殺される」顛末が描かれている。そして、この僧侶は最後まで「死んだ」者として描かれ続ける。9の最後の部分にもあるように、この「死んだ」僧侶はもう一度死ぬことになる。この「殺され」た僧侶は、「僧侶」作品内で最大の謎といえるだろう。二度死ぬとは一体どういうことなのか、これから一度目の死について見ていくこととする。

まず、注目したいのは、1の四行目の「棒の形」である。この「棒の形」が示しているものは四人の僧侶たちの男根である。つまり「棒の形／憎しみもなしに／若い女を叩く」という四／六行目は、「四人の僧侶」たちが「若い女」を犯している場面だと考えられる。「若い女」を折檻している道具が「棒」であると書かれているのではない。あくまでも「棒の形」と書かれている。

また、三行目の「ときに黒い布を巻きあげる」の部分からも彼らが「若い女」を輪姦していることが読み取れるだろう。「黒い服」はもちろん、僧服のことであり、彼らは「庭園をそぞろ歩」いている際に「若い女」を見つけ、自分の手で筒状の「黒い」僧服の裾を「巻きあげ」、性器を「棒の形」に固く変形させているのである。

三好豊一郎氏も述べているように、彼らの行為は空に飛び交い始めた「こうもりが叫ぶ」夕刻まで続けられる。しかも、その行為は「若い女」が「こうもり」の鳴き声のような不吉な叫び声をあげるほど残酷であることが想像される。

では何故、同じように「若い女」を輪姦した他の三人が「殺され」ず、一人だけが「殺され」てしまったのだろうか。僧侶たちは四人とも全く同じ行動をとったように見えるけれども、やはり「殺され」た一人は、他の三人と違う行動をしたに違いない。八／十行目「一人は食事を作る／一人は罪人を探しにゆく／一人は自瀆」から、事件後、「殺され」なかった三人の僧侶たちは日常生活の行動をとっていることがわかる。

また、十行目の僧侶の行動が「殺され」た僧侶を考える上で大きなヒントとなるだろう。十行目の僧侶は「若い女」を犯した直後にも関わらず「自瀆」をしている。つまり、「若い女」を犯す行為では彼の性欲は満たされていないかったと考えられる。日常生活にすんなりと戻っていくことのできた三人にとって「若い女」を輪姦したことは肉体的快楽ではなかったのである。このように考えていくと、「殺され」た僧侶が他の三人と違っていた点は「若い女」を犯した時に肉体的快楽を得てしまったことにあるのではないだろうか。「殺された」僧侶は、一人だけ単に「若い女」を犯したのではなく「若い女」に射精してしまい、肉体的快楽を得たのである。

本来、聖職者である僧侶は快楽が禁じられている身である。その僧侶が「若い女に殺され」たというのは、「若い女」の肉体から得られる快楽に身を委ねてしまったためである。つまり、「若い女」に生命を奪われたのではなく、「僧侶」としての存在意義を奪われてしまったのである。ここは僧侶の世界であり、その世界の中で「僧侶」の身分を剥奪されることほど、四人の僧侶にとって恐ろしいことはないだろう。

もちろん、快楽が禁じられているといっても、「若い女」を犯した四人の僧侶たちに自分の身が汚れてしまったというような罪の意識はかけられない。「酒」や「飽食のため肥」るような禁欲的とは正反対の僧侶たちの食生活（3）からも指摘できるように、快楽に浸りきった生活を送っている。けれども、この快楽によって彼らが僧侶の身分を剥奪されることはないのだ

う。何故なら、自分以外の誰かに、僧侶たちの生活が快樂であると断言されることはないからである。四人の僧侶が「朝の苦行に出かける」場面を想起されたい。「死ん」でない三人の僧侶たちは「鳥」、「魚」、「馬」の「姿」に変身して「苦行に出かける」(4)。確かに、いつ「かりうど」に撃ち落とされるかわからないし、もしかしたら「女中」に捕まるかもしれないし、「殺戮の道具」は非常に重い荷物かもしれない。しかし、普段と違う姿になって味わうスリルや、ただ「鐘をうつ」ことしかできない「死んだ」僧侶に対する優越感、快樂以外の何物でもないだろう。けれども、三人の僧侶たちは揃って、これは苦行であると重々しい口調で言うに違いない。つまり、快樂であるという証拠が見つかりさえしなければいいのである。「殺され」た僧侶は射精という肉体的快樂の証拠となるような行動をとってしまったのである。

四人の僧侶が住んでいる場所

この四人の僧侶が生活しているのはどのような場所だろうか。四人の僧侶たちの住む場所が想像できる個所を作品中から列挙すると、

- ①庭園をそぞろ歩き(1)
- ②深夜の人里から押しよせる分曉の洪水(2)
- ③美しい壁と天井張り／そこに穴があらわれ(2)
- ④一人は森へ鳥の姿でかりうどを迎えにゆく／一人は川へ魚の

姿で女中の股をのぞきにゆく／一人は街からの馬の姿で殺戮の器具を積んでくる／一人は死んでいるので鐘をうつ(4)

- ⑤畑で種子を播く(5)

- ⑥非常に高いブランコに乗り(5)

- ⑦井戸のまわりにかがむ(6)

- ⑧洗いきれぬ月経帯／三人がかりでしぼりだす／気球の大きさのシート(6)

- ⑨雨のなかの塔の上に(6)

- ⑩石垣の向うで咳をする(8)

- ⑪固い胸当のとりでを出る(9)

- ⑫世界より一段高い所で(9)

以上、十二個所挙げられる。

僧侶たちが住んでいるのは、庭園付きの僧院(①)で、周りは石垣で囲まれている(⑩)。僧院の敷地内には、鐘つき場や井戸、高い塔、とりでがある(④⑦⑨⑪)。石垣の外には畑があり(⑤)、開墾されているものの(②)、その土地はわずかで、大きな森が僧院を中心とする村を取り巻いている(④)。その森の中の高い木には、子供たちが遊ぶブランコが取り付けられている(⑤)。この村は街から遠く離れていて、森の中を流れる川の流れを辿ってゆくと(⑥)、その街に行けるのだが、馬に乗っても丸一日はかかる距離である(④)。

一見、「僧侶」で描かれる世界は我々の住む世界と何ら変わりのないように思われるが、この世界は時々、我々の世界とはかけ離れた現象が起こる。深夜、僧院を羊水が浸し(②)、僧

院の部屋の「美しい壁と天井張り」には「穴」があく(③)。

また、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとしぼりだす」こともできない「月経帯」と「氣球」ほどの「大きなシート」を僧侶たちは洗濯しなければならぬ(⑧)。

このように僧侶たちが住む世界を見ていくと、「僧侶」作品世界では前面に現れてこないもう一人の人物の存在が浮かんてくる。その人物とは、巨大な「月経帯」を使う女である。この女の巨大さは③からも伺えるだろう。「美しい壁と天井張り」にいた「穴」は、女の陰部なのである。この女の下半身だけが「僧侶」作品世界に登場していることから、いかに女の全身が巨大であるか想像できる。女は僧院や僧院を取り巻く村、森街よりも大きい。「僧侶」作品世界は、女の薄暗く湿った股の間に存在している世界なのである。

何度も繰り返すようだが、この女は「月経帯」を使い、「分娩」もする。つまり、この巨大な女は、生殖能力のある若い女と考えられるだろう。

四人の僧侶たちの行動

ここからは四人の僧侶たちが、女の股の世界でどのような行動をとっているのかをみていきたいと思う。

2は四人の僧侶たちが「務め」を行なっている場面である。1で「若い女」を輪姦したことを既に知っている私たちは、2で僧侶らしい「務め」が行われることは全く期待してはいない。

その予想通り、彼らの「務め」は「聖人形をおろし／礫に牝牛を掲げ／一人が一人の頭髪を剃り／死んだ一人が祈祷し／他の一人が棺をつくる」といったものである。ここで、四人の僧侶全員が、死に関係する行動をとっていることが読み取れる。三、四行目「聖人形をおろし／礫に牝牛を掲げ」るのは、生け贄を捧げる行為であるし、「頭髪を剃る」のは成長の証である毛髪を刈り取ってしまうことである。また、「祈祷」するのは「死んだ」僧侶であり、残る一人の僧侶は死者を安置する「棺」を作っている。

このような禍々しい「務め」を行なっている時に、八行目の「深夜の人里から押しよせる分娩の洪水」が起こる。「分娩」と示されるものの、決して新生児は現れない。十二、十三行目に「そこに穴があらわれ／雨がふりだす」とあるように、ただ、羊水が僧院を浸すのみである。巨大な女の出産は、四人の僧侶が行なう不吉な「務め」によって正常に為されなかったのであろうか。2において、巨大な女が出産した新生児については後に述べることをする。

次の3では、四人の僧侶の夕食の場面が描かれる。三、四行目「手のながい一人がフォークを配る／いぼのある一人の手が酒を注ぐ」とあるように、ここで僧侶たちの外見が描写される。作品中、彼らの外見について言及されているのは、この3だけといってもよいだろう。十二、十三行目でも「二人は飽食のため肥り／二人は創造のためやせほそり」と体型について述べられる。おそらく、「飽食のため肥」った一人は、肉と酒という

決して質素ではない食事の残り滓を鹵につけたまま、おくびを出し、「創造のためやせほそった」二人は、空腹による胃酸過多の口臭を吐き散らしていることだろう。このように四人の僧侶たちは、外見だけにとどまらない醜さであることが想像される。

この醜い僧侶たちが「食卓につき」、していることは「飽食」と「創造」である。「創造」の内容について、五行目以降、次のように書かれている。「他の二人は手をみせず／今日の猫と／未来の女にさわりながら／同時に両方のボデーを具えた／毛深い像を二人の手が造り上げる」。この個所には「手」という文字が繰り返し使われている。吉岡自身、「私の詩のなかで、〈手〉と〈掌〉という文字を探すことは、きわめて困難な筈である。それは私が意識的に、それらの文字を避けてきたからである」と述べ、さらに「〈手〉はこれからも必然性があれば使う」としていることから、僧侶たちに「手」で「創造」させる必然性があったと考えられる。

二人の僧侶たちが「創造」しているのは、「毛深い像」である。この像は「猫」と「女」、両方の肉体を「同時に」具えており、毛のある部分はより濃く、腰から太股にかけてのラインはより丸みを帯びている。また、「同時に」という単語は、一行前の「さわりながら」を受け、次の九行目、「造り上げる」にかかっている。猫であり女でもある「毛深い像」の肉体の感触を「手」に感じながら、「創造」という行為に動しんでいる。この感触を強調したいが故に、「手」という文字を繰り返し用

いたのだろう。

4は四人の僧侶が「朝の苦行に出かける」場面である。先述したように、「死ん」でいない三人の僧侶は、それぞれ「鳥」、「魚」、「馬」の「姿」になって「苦行」を行なう。「死んだ」僧侶は、「死んで」いるという理由のため、「鐘をうつ」だけである。僧侶の資格を剥奪されると、変身能力まで奪われてしまうのだろうか。そうだとしたら、僧侶たちが僧侶でなくなることに恐怖し、自分を剥奪されることは「殺される」と同じだと考えていても不思議はないだろう。

5は四人の僧侶たちが「畑で種子を播く」場面である。続く「中の一人が誤つて／子供の子供に蕪を供える／驚愕した陶器の顔の母親の口が／赭い泥の太陽を沈めた」の四行には、四人の僧侶たちが母子を凌辱した後、殺す場面が描かれている。四人の僧侶の「中の一人」は「子供」である少年を、おそらく少女と見「誤つて」、彼の臀部で僧侶たちは欲望を満たしたのだろう。この「子供」が少年であると予想できるのは、「臀」という単語からである。後に、吉岡は「サフラン摘み」で、少年が四つんばいになり、割れた尻を突き出している場面を描いている。吉岡にとって、少年と臀部という二つは切り離せないものだったのではないだろうか。更に、次の「供える」という言葉は、「子供」を死者として扱っていることを示している。そして、その場に居合わせた母親は、驚愕の叫びで口を開けたまま絶命する。母親の顔は血の気が失せて、陶器のように白くなっていることから、彼女が死体となることがわかる。その

母親の口はどろりとした真っ赤な血を吐いており、血と赤土が交じり合っただけの地面に母親の顔は半分埋もれ、口には泥が詰まっている。生命の象徴ともいえる「太陽」が「沈め」られたという個所からも、母親は殺されていることが読み取れるだろう。

母子を殺した僧侶たちの次の行動は、「非常に高いブランコに乗り／三人が合唱している」。「非常に高い」所に作られたブランコとあるので、このブランコは森の中の背の高い木に取り付けられているのだろう。太陽が沈み、暗い森の中でブランコに乗りながら、僧侶たちは歌う。二行前の「沈めた」という言葉の響きによって、ここで僧侶たちが歌うのは、魂を鎮める歌、レクイエムであることが想像できる。僧侶たちに凌辱され、殺された子供が遊んでいたに違いないブランコに乗って、彼らは合唱する。何という死者への冒瀆だろうか。しかし、僧侶たちの歌は不協和音になっており、完璧なレクイエムを歌うことができない。九、十行目で「死んだ一人は／果のからすの深い咽喉の中で声を出す」と続いているように、「死んだ」僧侶はしわがれた声しか出せず、ハーモニーを乱しているのである。そのうえ「死んだ」僧侶は、果の中のからすのように、一人、枝の上にうずくまっている。「死んだ」という理由で、彼はブランコにも乗せてもらえないのだ。

加えて、黒い僧服を身に付けている僧侶が、外見上の理由から「からす」に喩えられているのももちろんだが、ここでは「緒い」と「太陽」という言葉の繋がりで「からす」が導き出

されたという点を強調しておきたい。言うまでもなく、「太陽」は「赤鴉」もしくは「赤鳥」という別名を持つ。このことを踏まえ、十行目に登場する動物は「からす」に決定されたように思われる。言葉遊びとも呼べる吉岡の言語感覚と言えるだろう。この吉岡の持つ言語感覚については後述する。

6は四人の僧侶が、「井戸のまわりにかが」んで、洗濯をしている場面である。6を一読して、まず不思議に思うのは、洗濯をしている場所が「井戸」ということである。ここで4の四行目を思い出して頂きたい。「一人は川へ魚の姿で女中の股をのぞきにゆく」とある。この「女中」が「川」で洗濯をしている洗濯女であろうことは容易に想像できる。6で疑問なのは、近くに洗濯できる「川」があるのに、何故、「井戸」で僧侶たちは洗濯をしているのかということである。本来、「井戸」の水は飲料用として使われるものではないだろうか。また、「井戸」で洗っているものを見ると、三／六行目に「洗濯物は山羊の陰囊／洗いきれぬ月経帯／三人がかりでしぼりだす／気球の大きなシート」とある。「月経帯」など洗濯物は汚物にまみれている。その月経の混じった水を僧侶たちは飲料水にしているのだ。

先に述べたが、もう少し詳しく「洗濯物」について見ていくと、「月経帯」は「山羊の陰囊」からできており、「洗いきれぬ」ほど大きい。五行目の「三人がかりでしぼりだす」は四行目、六行目それぞれのフレーズにかかっていると考えられ、六行目に「気球の大きなシート」と大きさにについて言及されている

ことから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月経帯」であると言える。また、五行目の「しぼりだす」に注目すると、二行前の「陰囊」に注意する必要があるだろう。陰囊とは精子を産する睾丸を包むものである。僧侶たちが全身の力をこめて「しぼりだ」しているのは、一体、月経なのか精液なのか、一瞬混乱してしまう。まるで、二色の水滴が「洗濯物」から滴り落ちているようだ。そして、男性特有の生殖腺を女性性器にあてがって使う巨大な女は、ある一定の期間だけとはいえ、両性具有の存在だと言えるだろう。

続く二行は、「死んだ」一人がかついで干しにゆく／雨のなかの塔の上に」と6を締め括っている。せつかく洗った「洗濯物」を「死んだ」僧侶は、雨の降るなか、干しに行く。5と同様、「死んだ」僧侶の行為は、他の僧侶たちの調和を乱している。また、一人で行動する「死んだ」僧侶は、他の三人から苛められているかのようなものである。

7では、「死んだ」僧侶が、まるで苛められっ子のような立場にあることを顕著に示す場面が出てくる。五く七行目の「一人は死んでいるので／他の者にかくれて／三人の記録をつぎつぎに焚く」という個所である。他の三人が書いたものを焚いてしまう行為だけでも仕返しじみているが、こっそり「かくれて仕返しするところが、いかにも苛められっ子らしい行動である。「死んだ」僧侶が焼き捨てた「記録」の内容は、二く四行目の「一人は寺院の由来と四人の来歴を書く／一人は世界の花の女王達の生活を書く／一人は猿と斧と戦車の歴史を書く」とい

うものである。初めの一人は宗教について書き、二人目は世俗について書く。三人目は戦争を繰り返してきた人類について書いている。この三人の僧侶たちが書いているのは、まぎれもなく、僧侶たちの世界についてである。僧侶たちの創造する世界が生まれそうになっていた害であるのに、その世界を「死んだ」僧侶は、立ち上がる端から次々に叩き潰していく。ここでも、「死んだ」僧侶は、他の三人の僧侶たちの調和を乱している。

「死ん」でいない三人の僧侶たちが構築しようとした世界は、言葉によって成り立っている。そして、僧侶たちが登場する「僧侶」という作品も、吉岡の言葉によって築かれている点に注目すると、「僧侶」も崩壊する直前のものかもしれないという不安定な世界が見えてくる。

8は、「僧侶」全体を通して三個所しかない過去形のうち二つが使われている。二、三行目の「一人は枯木の地に千人のかくし児を産んだ／一人は塩と月のない海に千人のかくし児を死なせた」の文末である。ほとんどが現在形、現在進行形で書かれている「僧侶」の中で、過去形を用いているのは、意味するところがあるに違いない。

二行目を読むと、男である僧侶が「千人のかくし児を産んだ」という点に、まず違和感を覚える。たとえば、この僧侶が「かくし児を産んだ」としても、男が「産んだ」「千人のかくし児」たちは正常な新生児ではないだろう。その上、「千人のかくし児」たちは「枯木の地」に産み出されている。「枯木の地」という生物が死に絶えた場所で、新生児が生き延びることは不可

能である。僧侶は新生児を殺すために「産んだ」とも言えるだろう。

また、次の僧侶が「千人のかくし児」を「死なせた」のは、「塩と月のない海」である。「塩と月のない海」は、「枯木の地」と同様、新生児たちが生きていくことのできない子宮を連想させる。この子宮は、満たす羊水にも塩分はなく、月の満ち欠けの周期に合わせて起こる生理現象もないのである。塩分がなく、月のような満ち欠けもない海は既に海とは言えない。この二行は、「死産」や「墮胎」といった死のイメージを喚起させる。

「僧侶」中に出てくるもう一つの過去形の、5の六行目、「緒い泥の太陽を沈めた」を見ると、「沈めた」という言葉は、母親が「殺された」ことを意味している。つまり、「僧侶」作品中に現われる過去形は、僧侶たちが殺人を犯している場面に使われていると言ってよいだろう。

そして、四、五行目は「一人は蛇とぶどうの絡まる秤の上で／死せる者千人の足生ける者千人の眼の衡量の等しいのに驚く」と続く。「死せる者千人」とは、三行目の「塩と月のない海に」「死なせた」「千人のかくし児」を指し、「生ける者千人」とは、二行目の「枯木の地に」「産んだ」「千人のかくし児」を指す。先ほど述べたように、「死せる者千人」と「生ける者千人」のどちらも死んでいる新生児に他ならないが、「秤」に載せているものが「死せる者千人の足」と「生ける者千人の眼」という部分で読み手は首を捻ることになる。「足」と「眼」という大きさも重さも機能も異なっている器官が秤にかけられており、

しかもその「衡量」は「等しい」。つまり、この「秤」は正常に働かない、壊れた「秤」なのである。

「秤」をもう少し詳しく見ていくと、「秤」には「蛇とぶどう」が絡まっており、いかにもいわくありげな代物である。この場面で「蛇」と「ぶどう」を比喻と考えるなら、男性性器の象徴である「蛇」¹³と果実の房から連想される乳房というイメージから、「蛇とぶどうの絡まる秤」は、両性具有の存在を示すとか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付与することができるだろう。しかし、朝吹亮二氏が指摘するように¹³、「僧侶」で使われている言葉を何かの象徴と捉えずに読むこととしたい。従って、この場面では「秤」に「蛇とぶどうが絡ま」り、存在感や威圧感はあるものの、「秤」の役割を果たすことのできないガラクタが描かれているに過ぎないのだ。

また、四、五行目で「死ん」でいない一人の僧侶が「驚く」ことにも注目する。この僧侶は、どちらかに秤の皿が傾くだろうという予想に反して、秤が水平のまま、動かなかったことに驚いている。つまり「秤」が壊れていることに気付いていないのである。

ここで思い出すのは、一つ前の7の場面である。7で、「死ん」でいない三人の僧侶たちは、自分たちが不毛な努力をしているに過ぎないことに気付きもせず、「記録」を書いている。同様に、8でも「死ん」でいない三人の僧侶たちは、自分たちの不毛な作業に気付いていない。

次の「一人は死んでいてなお病氣／石垣の向うで咳をする」

という二行には、相変わらず除け者にされている「死んだ」僧侶の行動が書かれている。しかし、「死んだ」僧侶の行動をよく見ると、今までは、他の僧侶との調和を乱すような行動をしていたのに、この個所では何もせず、ただ咳き込んでいただけである。7までは、「死んだ」僧侶によって、他の三人の行動が無意味なものとされたように描かれていたが、実は、「死んだ」僧侶と同じように、他の三人も結局は無意味な行動をとっていたに過ぎないことが、8で明らかにする。8は、「死んだ」僧侶と「死ん」でいない僧侶という対立する構図が見えかけであったと判明する場面である。

最後の章である9を見ると、四人の僧侶は「固い胸当のとりでを出す」。まるで、戦に敗れて降伏する兵士たちのようである。僧侶たちにとって、心臓を守る胸当の役割を果たすのは僧院であろう。僧侶であることの証でもある自分たちの「とりで」を捨て、「生涯収獲がない」という理由で、「世界より一段高い所で／首をつり共に啜う」。この「世界より一段高い所」とは、先述したように、巨大な女の股の間の上部にある、巨大な女の子宮である。巨大な女の子宮で、四人の僧侶は、初めて四人一緒の行動をとる。子宮の中で同じようにぶら下がっている僧侶たちは、僧侶であることを放棄して、巨大な女の四児の胎児になることを選んだ。

今までみてきた1～8では、「死んだ」僧侶と他の三人の僧侶の行動は区別されていたが、9では、四人全員が死ぬという結末を迎える。結局、僧侶たちは同じ存在だったのである。こ

のことは、先述した吉岡の言葉遊びともいえる、言葉の使い方からも指摘できる。「四人の僧侶」は「死人の僧侶」であり、「四児」は「死児」と連想できる。ここで注意すべき点は、9で三人の僧侶が「死んだ」僧侶と同じ存在に追いついたのではないということである。1～9まで「四人の僧侶」と繰り返されているように、四人の僧侶たちは、最初から「死んだ」僧侶と同じ存在であった。

最後、「僧侶」作品は「されば／四人の骨は冬の木の太さのまま／縄のきれる時代まで死んでいる」と締め括られている。四児の死児である僧侶たちは、「縄」ならぬ臍の緒が切れて、巨大な女の子宮から出産されない限り、つまり、巨大な女から許可が下りない限り、胎内でぶら下がっているのだ。

おわりに

以上のように、1～9の本文を順に辿ってみて感じるのは「僧侶」作品はまるで紙芝居的とも言うべき性格を持っているということである。「僧侶」を読み、場面が容易く脳裏に浮かんでくることだけではない。その場面の細かい部分は、読み手側が十分に補わねばならない必要があるという点で紙芝居的なのである。「僧侶」が「絵画的」であるとしても、その絵は決して写実的ではない。これは、「僧侶」には何一つ具体的な描写がないことに起因する。しかしながら、具体的な描写が排除されることによって「僧侶」作品中に、一登場人物として出

現するわけでもないのに、巨大な女 の存在を読み手が自由に創造することを可能にしている、という点が指摘できるだろう。そして、このように読み手側が作品へ介入することを、吉岡詩作品が拒否していないのであれば、次のような予想もまた成立するであろう。

死児である四人の僧侶たちは、巨大な女の子宮から分娩されても、決して産声をあげることはない。彼らは、四児の死児として生を受けるに違いない。そして、この産まれた死児の物語が「死児」作品に描かれているのではないか。この「僧侶」から「死児」への繋がりについては、機会を改めて論じることしたい。

(注)

(1) 「昭和三十三年ごろ、週末に、気が向くとよく谷川温泉へひとりで遊びにいったものである。或る時、早春かと思うが、(中略)わたしは朝が来るまで、詩を書こうと試み、そして「苦力」が曉近く完成した」と述べている。
〔私の作詩法? 』『詩の本』Ⅱ、一九六七年十一月、筑摩書房)

また、「死児」も「非常な緊張の数日の徹夜のうちに」執筆された、と飯島耕一氏は回想している。(『青海波——あるいは吉岡実をめぐる走り書』『現代詩読本 吉岡実』、一九九一年四月、思潮社)

(2) 飯島耕一「青海波——あるいは吉岡実をめぐる走り書」

(3) 入沢康夫氏の発言。(討議 大岡信・入沢康夫・天沢退二郎・平出隆 自己侵犯と変容を重ねた芸術家魂 『昏睡季節』から『ムーンドロップ』まで』『現代詩読本 吉岡実』)

(4) 第二詩集『静物』所収の「過去」についての発言。(3)に同じ。

(5) 平出隆氏の発言。(3)に同じ。

(6) 三好豊一郎氏は、「こうもりが飛びはじめの夕刻まで、という時間的説明のみならず、異形の動物の姿とその小さく鋭い鳴き声から、悪魔的な黒装束の動きと女の悲鳴までを感じさせる」と指摘する。(「半具象——「僧侶」管見」『現代詩手帖』第三卷・第一〇号、一九八〇年十月、思潮社)

(7) 「手と掌」(イメージの冒険③「文字」一九七八年八月、河出書房新社)

(8) (7)に同じ。

(9) 金井美恵子氏は、吉岡実詩作品の中の「手」の使われ方について「非常にはっきりしてて触覚との関わりで必ず出てくる」と指摘する。(対談 吉岡実×金井美恵子 一回性の言葉 現実とフィクションの混淆へ)『現代詩手帖』第二三卷・第一〇号)

(10) 一九七三年七月、『現代詩手帖』に発表。

(11) 「そこでは 少年が四つんばいになって／サフランを摘んでいる」(第四、五行)

「割れた少年の屍が夕暮れの岬で／突き出されるとき」
(第十、十一行)

(12) 『イメージ・シンボル事典』(一九八四年三月、大修館書店)

(13) 『詩集『僧侶』以後、吉岡実の言葉は、観念としてではなく、倫理としてではなく、比喩としてではなく匿名の位置を獲得する』(朝吹亮二「エニグム・アノニム」『現代詩読本 吉岡実』)

(14) 朝吹亮二氏は「彼らは言葉遊びではなく死人の僧侶でもある。最初には四人いた僧侶が、作品が始まるやいなや一人欠如する(中略)そして作品の最後で全員が死にふたたび四人にもどる。全員が死ぬので一人の死者にもどるといってもいいかもしれない」と述べている。(13)に同じ。

(15) (3)に同じ。

(16) 一九五八年七月、『ユリイカ』に掲載。初の長詩。

(かのうまき／本学大学院修士課程)